



第九卷第六號

沈着なる可きこと

それがし

人の常にそはくとして沈着のないのや又は何事かあつた時、忽ちに狼狽して見苦し
 い容子を顯はす等はみな大抵心の淺き者のなす事であつて、決して思慮分別があり、
 且勇氣のあるものゝ爲すことでない。古語にも「重らざればすなはち威あらす」と教
 へてある。其れで武人が、武術を修行するには常に互に不意打をして嗤嗟の間に體をか
 わし又、これを防ぐことを練習しつゝ、精神のなちつきを作り、學者は事物の理を考
 究して斯くくの折はかやうに分別す可きもの、云々の時はかやうに虚置す可きもの
 などと云ふことを工夫して物に動せぬ修行を積むのである、非常のあつた場合などに
 能く其危難を逃れて却つて幸福の境に至ることを得た人々は先づ此沈着があつて然る
 ののちよ
 後宜しきに處せらるゝもので英雄の傳などに其人物を評して、沈勇だの、慎沈だの、
 莊重だのとあるは、いかにも其人柄が推し量られて頼もしく侮り難いやうに思はるゝ
 が、これに反して輕侮だの、輕跳だのと云ふと誠に頼もしげなく侮り易きやうな心
 地がある、彼青淵の底深き處は常に靜かであつて淺き處には波の立つが如く思慮深き
 人は沈着にして思慮淺き人は輕躁なものである。